

読後雑感：2011年 第10回

小島正憲

1. 「中国人は本当にそんなに日本人が嫌いなのか」
2. 「中国、インドなしでもびくともしない日本経済」
3. 「魯迅」
4. 「中国“日本侵略”の野望をこう打ち砕け！」
5. 「証言 日中映画人交流」

1. 「中国人は本当にそんなに日本人が嫌いなのか」 加藤嘉一著 ディスカヴァー・トゥエンティワン 3月20日

著者の加藤嘉一氏は、現在、27歳の若さである。まことに頼もしい日本男児である。このような若者がいれば、今後の日本を安心して託すことができる。加藤氏は今、中国のマスコミで大活躍中の人物であり、彼自身がそれを、中国で「2009年は、200本のコラムを書いた。テレビや雑誌の取材も318回受けた。2010年、この数字はほとんど変わらない。「量から質へ」という個人的戦略があつて、少しだけ数は減ったけど、それなりの露出は保持している」と書いている。

この本は加藤氏が自身の中国感を書いた物だが、常に加藤氏の体験し知覚している日本と対比しながら、論を進めるスタイルを取っている。それは若者らしいさわやかな切り口であり、いささかの迷いもなく自己主張を展開していることに、私は驚きとうらやましさを感じた。たしかに若者であるが故に、その論に深みはないが、それは年齢と共に加味されていくに違いない。

加藤氏は歴史認識の問題に論及して、「日本人は、中国人が日中戦争中に受けた被害の深さを理解するように努め、中国人もまた、日本人の第2次世界大戦観が複雑なものだということを理解するべきだ。これは、現実的な問題である。和を以って貴しとなす、これ以外に選択肢はない」と言い切っている。加藤氏は中国人に向かい胸を張って、堂々とするように発言しているという。彼のような若者の出現を前にして、私は、「老人(私を含む)は早く消え去るべき」という持論に確信を持った次第である。

2. 「中国、インドなしでもびくともしない日本経済」 増田悦佐著 PHP 研究所 4月5日

副題：「新興国市場の虚構を暴く」

帯の言葉：BRICSは本当に“希望の星”なのか？ 強欲欧米人、経済メディアにだまされるな！

増田悦佐氏は、この本でBRICS諸国の経済をこき下ろしている。「中国はニセえり経済、インドはインクレディブル、ブラジルはサンバとサッカー、ロシアは権力の闇」と書いている。私は中国、インド、ロシアでは現地でのビジネス経験がある。その視点で検討してみると、増田氏の主張はそれぞれに極論が多く、あまり参考にはならない。増田氏は中国が背広の下には何も着ておらず、胸から上だけの服で、エリだけを見せて、立派なワイシャツを着ているように見せかけていると揶揄し、その実物の写真まで載せている。そして「結局、中国経済は安い労賃と環境の維持保全にあまりカネをかける必要のない社会だということで、外資企業に儲けの場を提供しているだけの、あわれな国土賃貸業者にすぎないのだ」と述べている。中国経済については私も「砂上の楼閣」と見ているが、20年前の中国ならいざ知らず、私はいまどきこんなワイシャツを見たことがない。今、中国人は綺麗なワイシャツを着ている。また中国経済が安い労賃を売り物にした時期はすでに過去のものになっている。増田氏が文中で引用している文献なども古く、あまり参考にはならない。

ことに増田氏はほとんど現地には足を運んでおらず、各種の文献のみを渉猟して、この本を書いている。ブラジルについては残念ながら、私も行ったこともないので軽々しく発言はできないが、幸い、今年の6月中旬に、ある経済視察団の一員としてブラジルに行くことになっている。この国についてはその後には検討してみたい。最近、ブラジルには、富士康や華為など台湾・中国系の企業が進出しており、それを見るのも私の楽しみの中の一つでもある。ことに富士康はブラジルへの1兆円の追加投資を決めたばかりである。

増田氏は、「確率論的には何十年に一度、何百年に一度、あるいは何千年に一度だろうが、天変地異は起きるときには起きる。そして偉大な指導者の号令一下、一糸乱れず整然と行動できるような組織になればなるほど、その戦略では想定していなかったような事態に対処するための対案が出て来なくなる。…自慢じゃないが—いややっぱり大いに自慢してしまおう—無力・無策・無能と三拍子そろった指導者しかいない日本のような国では、すばらしい戦略が的中することも絶対ないかわりに、戦略で想定していなかった事態で立ち往生ということもない。そもそも戦略がないからだ。それが、中国やインドやブラジルやロシアのような国家統制で経済を運営している国の弱みであり、日本の強みなのだ」と書いている。現在、日本は想定外の事態に見舞われており、とても上記のように自慢できる状態ではない。増田氏はただちにこの文章を修正するべきである。

3. 「魯迅」 藤井省三著 岩波新書 3月18日

副題：「東アジアを生きる文学」

帯の言葉：「現代中国は魯迅文学を抜きには語れない！ 東アジアのモダンクラシックとなった作品を読み解き、その生涯にせまる」

藤井省三氏はこの本で、東アジア現代史を簡略に記しながら、魯迅の生き様を描き、その主著作の概要を紹介している。したがってこの本を読めば、魯迅文学の背景を理解し、魯迅の懊悩を知ることによって、魯迅の作品をさらに深く堪能できる。今までの私の魯迅作品の読み方が、いかに浅薄なものであったかを分かってくれる有り難い本である。

藤井氏は、「魯迅は、中国における国民国家建設にとって文学が不可欠である、と考えていた。彼にとって文学とはコミットメント(社会参加)の一つの方法であり、文学と革命は一つであった」と書き、魯迅の生涯を多くのエピソードで綴っている。その中でも、「(辛亥革命が勃発したとき、故郷の紹興府中学の教員として)魯迅は学生武装隊を率いて城内警備にあたり革命軍の入城を迎えている」という武闘派としての魯迅の紹介には、驚いた。私はこのような面が魯迅にあったことを知らなかったからである。また藤井氏は魯迅の上海における生活が、著作の印税などで意外にゆとりがあったこと、そのような環境で17歳年下の許広平と生活(同棲)していたことなどを、「魯迅が諸都市遍歴後の上海でようやく手に入れた中産階級の安定した暮らし」と書いている。1930年代半ばの在上海日本人は約2万6千人で、その大多数が虹口区に住んでいたと記し、それらの日本人を背景としたからこそ、内山完造の内山書店も存在できたと書いている。

藤井氏は、竹内好氏の魯迅著作の日本語訳に対して、「魯迅の文体は屈折した長文による迷路のような思考表現を特徴とするが、竹内訳は一つの長文を多数の短文に分節化して、明快な日本語に変換しているのである。伝統と近代化のはざままで苦しんでいた魯迅の屈折した文体を、竹内好は戦後の民主化を経て高度成長を歩む日本人の好みに合うように、土着化・日本化させているのではないだろうか」と疑問を呈している。

また藤井氏は、「戦前に毛沢東が聖人化した魯迅を、戦後の共産党政権が独裁体制の正当化に利用し続けた」と書き、最近の中国では、「40歳以下、特に若い女性は魯迅を読みません」という中国人の言葉を紹介している。

4. 「中国“日本侵略”の野望をこう打ち砕け！」 平松茂雄・田母神俊雄著 WAC 3月3日

帯の言葉：「中国は2020年に空母6隻を持つ！ 日本の周辺は中国の海になってしまう！」

「中国は軍力を強めて、覇権国家になろうとしている」(田母神) 「それは私が保証します」(平松)

「中国は軍力で劣る相手を平然と脅かす」(田母神) 「大事なことは軍事バランスですね」(平松)

平松・田母神両氏は、「中国は国民生活を二の次にして、ひたすら核ミサイル開発、ついで通常戦力の現代化に邁進して世界の“軍事大国”に成長し、それを土台にして、いまや日本を追い抜く“経済大国”に成長しつつある」と書き、「空母を含め、中国の軍備拡張にどう対応するかは、日本にとってこれからの十年で最重要課題といっていると思います」と述べている。つまり両氏は、今後も中国が経済成長を続け、その結果、軍事大国と化し、尖閣諸島を含めて日本を侵略する。それに対して日本は核を含め軍備を増強すべきであると主張しているのである。さらにこの本の半分近くを割いて、日米同盟がいかに当てにならないものかを書いている。

私は中国がこのまま経済成長を続けることには、かなり無理があると考えている。したがって経済成長の裏付けがないため、軍備の増強も続けることはできないと見ている。ただし私には中国の軍力についての評価については、それを正しく行う能力も資料もないので、あまり遅くない時期に軍事専門家を交えて、検討してみたいと思っている。

文中で田母神氏は、「中国はもともと人権無視のお国柄なので、漁師が5百人や千人、死んだって騒ぐようなところではない」と書いているが、これは暴論である。

5. 「証言 日中映画人交流」 劉文平著 集英社新書 4月20日

帯の言葉：「やっぱり、傷を乗り越えた人間にしか、映画は描けないってことじゃないですかね」

私はこの本で初めて、「佐藤純彌監督、高倉健主演の『君よ憤怒の河を渉れ』は、文革後に初めて公開された資本主義国映画として、鄧小平による改革開放時代の幕開けを示すシンボリックな作品となった」ということを知った。これでやっと中国の中年以上の層で、高倉健の人気の高い理由がよくわかった。また高倉健が内田吐夢監督に、「お前はマルクスを読んだことがあるか」と聞かれて、「読んでません」と答えると、「そんなんじゃお前はいい俳優にはなれないよ」と言われたエピソードを紹介している。これは当時の映画関係者に、満州帰りの左翼系が多かったことを物語っている。

劉氏は初めて日中合作映画「未完の対局」を撮った佐藤純彌監督に、「中国側のプロデューサーの汪洋さんもしばしば、“日本側の言うようにしろ”とおっしゃっていました。彼の基本的な考え方は、文革の空白期を経て、中国映画を作り直すには日本側の指導が必要であると。だから汪洋さん自身もやはりその教条的な考え方が嫌だったのだろうと思います」と語らせている。

また、「だから国の印象をステレオタイプで決めつけてはいけません。本当にその辺は僕たちの職業の問題でもあって、作る側は、話がおもしろければ良いとか景色がきれいなら良いではなく、表に出す出さないは別として、何か感じ合うようなものを必ず持っていなければならないと自戒しています。ジャーナリズムの怖さというのを、僕は身にしみて理解しているわけです。文革時代の紅衛兵と同じようなもので、戦争中に過ごした子供時代はもう完全に洗脳されていた。相手国に対して抱いているステレオタイプのイメージというのは、最初にどう思い込まれたかということもあるわ

けだけど、むしろ外国の人達と接触したことがない人達が抱きがちなイメージです。それを防ぐためには、どんどん外国人と接触して、自らのステレオタイプを直していくというのが、一番良いと思う」と述べさせている。

続いて劉氏は、栗原小巻、山田洋次氏へのインタビューや木下恵介氏への回想などで、多くの貴重な証言を引き出している。

以上